

支援会員の活動紹介 (有明海の再生を願い当機構の活動を支援してくださっている会員の皆様) 第9号 国際技術コンサルタント株式会社 様

ー歴史・文化・水辺再生の地域づくりをめざしていますー

「有明海を“豊饒の海”に再生したい」との思いで、有明海再生機構・佐賀県との協働で有明海の地形図をつくりました。

それは、海底水道の名前が入った海底地形図、海苔区画漁業権図、貝類区画漁業権図、カキ礁図をデジタル化したものです。それらは、国土地理院の地図をベースにしていますので、どのような組み合わせも可能です。これまでの有明海再生の研究内容、これから調査資料を重ね合わせるデジタル化を進めますと、有明海再生の貴重なデータとなります。この地形図には、経度・緯度を明示しており、海苔区画の標識である鋼管の位置も明確です。干潟や濁筋の位置が明らかになり今後の変化なども的確に図化できます。有明海の再生に微力ですが貢献したいと思います。現在は、このデジタルの手法を用いて、歴史・文化・水辺の地域づくりを目指す「佐賀城下まちづくり構想」のお手伝いもしています。有明海の再生には、有明海だけを見るのではなく、自然を大切にする背後地の地域づくりも忘れてはならないと思うからです。



有明海(佐賀県海域)地理情報図
<お問い合わせ>
国際技術コンサルタント株式会社
佐賀県佐賀市鍋島4丁目10番6号
TEL:0952-31-3653

正会員のご紹介 有明海に関する研究を学術的に行う大学等の研究者で構成される正会員に、新たに入会していただきました。

■伊豫岡 宏樹 助手 (福岡大学工学部社会デザイン工学科)

私は九州大学で有明海再生機構の理事長でもある楠田先生の研究室に在籍していました。今は、有明海に生息する二枚貝、特にカキ礁による環境浄化に関する研究および底質の改善に関する研究を行っています。ご存じのとおり有明海は多くの研究者が関わっている海で、研究会やシンポジウムも盛んに行われいろいろな視点から有明海を理解する機会に恵まれています。その反面、社会的な話題性や影響の大きい有明海では、研究の信頼性はもちろん住民の方々への情報提供のあり方、環境保全と漁業との兼ね合いなど従来の現象解明型の研究では対応できない問題が山積みです。私は研究者としてまだ未熟者ですが、多くの先生にご教授をいただきながらこれらの有明海の研究に取り組んでいきたいと思います。よろしくお願ひいたします。



支援会員募集のご案内 ※詳しくは事務局までお問い合わせください。

有明海再生機構では、当機構の趣旨に御賛同いただき、活動を支援してくださる
支援会員(企業・団体・個人)を募集しております。

年会費: 企業・団体… 一口 5万円 個人… 一口 1万円

編 集 後 記

有明海の秋の風景を見に行こうと、東与賀の干潟よか公園に出かけたところ、ちょうど赤く色づき初めているシチメンソウを見ることができました。例年シチメンソウの見ごろは11月頃だそうです。(く)

発行

NPO法人 有明海再生機構事務局

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-5-14 佐賀県自治会館4階

TEL(FAX兼用): 0952-26-7050

E-mail: npo-ariake@ceres.ocn.ne.jp

ホームページ: http://www.npo-ariake.jp/

※H20.8月、事務所移転で住所が変わりました。電話(FAX)はそのままです。

CPDS認定講座
(予定)

有明海講座 【有明海沿岸の地盤】

入場無料

- 【テーマ】 有明海沿岸の地盤 干拓から有明沿岸道路まで～有明粘土との付き合い方～ (仮)
- 【講師】 佐賀大学有明海総合研究プロジェクト特任教授
NPO法人有明海ぐるりんネット理事長 荒牧 軍治
- 【日時】 平成22年1月20日 (水) 14:30～16:00
- 【会場】 アバンセ第2研修室 (佐賀市天神三丁目2-11 どんどんの森内)
- 【募集数】 70名 (事前申込制: メールまたは、ファックス・電話にて前日まで)
- 【主催・申込】 NPO法人有明海再生機構事務局

有明海講演会 ~有明海の貝類の過去・現在・未来~ を開催しました

平成21年9月5日(土)に熊本県立大学講義棟1階中講義室2にて「有明海講演会～有明海の貝類の過去・現在・未来～」を開催しました。当日は大学、企業の研究者、学生、漁業関係者など130名の方々にご参加いただきました。熊本県の地元メディアにも多く取り上げていただくことができ有明海への関心の高さがうかがえました。

熊本県立大学の堤教授の講演では、最初にアサリ漁獲の変遷についての話がありました。熊本では1960年代には65,000トン獲っていたアサリがわずか30年後の1995年にはわずか1,000トンあまりに漁獲が減少してしまったということです。現在では干潟に砂をまくことで回復することが分かり、約7,000トンの漁獲があるそうです。

熊本県水産研究センターの中野部長の講演で、クマモトオイスターが熊本県からアメリカに渡りブランドとして確立された歴史や現在の八代海での養殖研究の成果を知り、『幻のクマモトオイスター』の復活がとても楽しみになりました。

各講演後には活発な質疑応答が行われ、参加者アンケートでは「有明海の貝類の動向、減少した原因など詳しく知ることが出来とても興味深い内容だった」等の意見をいただき、有明海再生にとって有意義な講演会を開催することができたと思います。

演題	発表者
有明海の主な水産資源としても貝類(アサリ、ハマグリ、タイラギ)の動向について	熊本県立大学 教授 堤 裕昭
有明海奥部におけるサルボウ資源の過去・現在・未来	佐賀県有明水産振興センター 副所長 川村 嘉応
八代海からアメリカへ渡った牡蠣「クマモトオイスター」の過去・現在・未来	熊本県水産研究センター養殖研究部長 中野 平二



会場の様子



講演の様子



新しいステージに入った有明海環境問題

有明海再生機構 副理事長 荒牧 軍治

平成20年6月の佐賀地裁判決と平成21年8月の民主党政権の誕生で有明海環境問題は新たなステージに入ったと考えることができます。

開門調査を命ぜた佐賀地裁判決は、有明海問題が今もなお社会問題として継続していることを改めて認識させました。佐賀地裁判決には事実誤認が含まれるとして国は控訴しましたが、農林水産大臣はその代償として「開門のための環境影響評価」を実施すること及び水産振興のための補助事業を行うことを言明しました。農林水産省から各県に委託された水産振興事業は、各県それぞれが立案した計画に従って平成21年度から実施されています。また、九州農政局が本年4月15日に熊本市で開催した「諫早湾干拓事業の潮受堤防の排水門の開門調査に係る環境影響評価方法書骨子(素案)」に関する説明会は、「開門調査を早急にすべき」「絶対にすべきではない」の意見が飛び交い、大荒れになりましたが、それでも着々と開門調査に向けた準備が進められて、8月4日には方法書(案)が示され、現在パブリックコメントの募集が行われています。

8月30日の総選挙で政権が民主党に移行したこと、有明海環境問題の方向性に大きな影響を与えることは間違いません。長崎県の民主党県連は諫早開門調査に明確に反対していますが、民主党佐賀県連はローカルマニュフェストで開門調査を強く求めていますし、新政府の菅直人副総理が有明海異変が社会問題化した当初から諫早干拓水門の開放を強く主張していたことを考えると、開門調査あるいは常時開門に向けて大きな力が働くことは十分に考えられます。

2000年冬に海苔の色落ち被害に端を発して社会問題化した有明海環境問題は、なぜこのような海になったのかの原因解明と、元の海に戻すにはどのような対策を取ればよいかに関する科学的知見の蓄積が十分でないことを理由に、諫早干拓が有明海環境問題にどのような影響を与えたかについての十分な議論が行われてきました。しかし、佐賀地裁判決と民主党政権への移行という2つの社会的事件は、諫早干拓が有明海の環境にどのような影響を与えたのか早急に解明することを命じています。

諫早湾奥部の締切が干拓堤防前の諫早湾の環境に大きな影響を与えていることは間違ありませんし、有明海の全領域で発生した環境異変、魚介量の減少の原因が全て諫早干拓にあるとは考えられませんから、答えはその中間にあるはずです。今、諫早干拓が有明海におけるどのような事象にどの程度の影響を与えたかを一度明確にした上でなければ、有明海環境の改善は一歩も前に進まない状況にあります。研究者は早急に研究の道筋を示すロードマップを明示し、それに従って研究を開始する必要があります。また、諫早開門調査を実施すれば何が明確になるのか、開門調査を実施するにはどのような準備が必要なのか、開門調査によって悪い影響が発生することはないか、そのような議論を早急に深める必要があります。行政担当者、専門家、利害関係者が一堂に会した議論の場を、「開門調査のための環境影響評価」が実施されている間に構築し、議論を開始しなければなりません。

勿論、その間にも研究者は、有明海異変の原因解明と再生策の検討を、それぞれの考えに従って継続しておかなければなりません。有明海の環境再生の道筋が全て諫早開門調査、常時開門で明確になるとは考えられないからです。



(写真：東与賀海岸)

地球環境基金助成団体活動報告会

10月17日(土)18日(日)に日本青年館(東京都新宿区)で開催された平成21年度地球環境基金助成団体活動報告会に参加しました。

当機構は独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金から「有明海再生に向けてのカキ礁復元を軸とした活動」に対して助成を受けて活動(2年目)しています。

今回はこれまでの自己の活動の振り返りと、それぞれの活動において抱く悩みや課題についての議論を通じ、相互に活動の質を向上していくための機会として、また、2年目、3年目以降の今後の活動をよりよくしていくための場として基金から2年目の助成を受けて活動をしている団体の中間報告会ということで開催されました。



当機構発表の様子

全体会で重要とされたのは次のような事でした。

- 1.情報発信の目的は自分の判断で行動してもらう為に説得すること。・人を動かすこと
- 2.人を動かすための準備が大事・事前の準備が重要
- 3.望むだけではダメ、強制する事もダメ、相手を理解し、必要な事を考えることが大事

分科会の活動報告では、25分の持ち時間があり、話しの導入として、他に類を見ない有明海の特徴と環境の変化について、有明海の貴重さ、環境改善の必要性を訴えました。

また、環境悪化を改善する動きの中で有明海再生機構が発足したこと、その機構の活動についての説明を行いました。本題の活動報告については、有明海講演会等の広報活動、カキ礁観察会、カキ礁復元実験などの活動について個々の具体的活動内容、成果、問題点、その後の改善点など細かく報告しました。最後に、今後の活動についての話を報告を終えました。

報告の後のアドバイザーからのアドバイス、質疑応答、意見の交換のなかで活動における分担(専門的な部分については研究機関へ委託する等)の必要性について漁業者への広報活動をどのように行っているのか?カキ礁復元は収益(収穫・販売)まで考えているのか?などのアドバイス、質問がありました。

今回の報告会に参加してあらためて強く感じたのは、各機関と協力して活動を行うことの大切さ、NPO法人活動の中心とすべき活動は他機関が行うことの少ない一般市民へ向けての啓発活動であるということ。

一般市民個々が自身で考え、活動に参加するきっかけとなるような活動が我々に強く求められているのではないかと考えさせられた報告会でした。

今回の報告会で学んだこと、他のNPO活動手法等を今後の機関活動に活かしていきたいと思います。

『環有明環境情報データベース』情報募集中!!

URL (<http://kankyo.npo-ariake.jp/>)
または、ホームページより (<http://www.npo-ariake.jp/>)

当機関では環有明環境情報データベースを公開しています。皆さんお持ちの有明海に関する情報をご提供下さい。たくさんの情報を集めて皆さんで共有し、使いやすく便利なデータベースにしていきましょう。